

## 「命の言葉について」

2018年07月18日

ヨハネの手紙 一 1章1節～4節 初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます。すなわち、命の言について。——この命は現れました。御父と共にあったが、わたしたちに現れたこの永遠の命を、わたしたちは見て、あなたがたに証しし、伝えるのです。——わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたもわたしたちとの交わりを持つようになるためです。わたしたちの交わりは、御父と御子イエス・キリストとの交わりです。わたしたちがこれらのことを書くのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるようになるためです。

ヨハネ福音書とヨハネの手紙（一）（二）（三）を「ヨハネ文書」と呼んでいる。主イエスに現された「神の愛」をひたすら伝えようとする信仰に立ち、「命」「光」「真理」「掟」など、共通の言葉も多い。同じ信仰を共有するヨハネ教団内で編集したものと思われる。しかし、書かれた時代背景には違いがある。ヨハネ福音書は、ユダヤ教の会堂から追い出され、迫害を受けている状況を背景にして書かれている。ヨハネの手紙が書かれた時代は、肉を軽視し霊を尊ぶ二元論のギリシア哲学の影響を受け、福音を抽象化して理解するグノーシス主義と言われる「分離主義者」が起こっていた。彼らは肉を持たない霊的なイエス像を主張し、現実から遊離し、理念的にキリスト教を説いた。ヨハネの手紙の著者は、彼らを偽預言者と言い、反キリストの霊であると厳しく批判している。主イエスは肉を持って生き、十字架で死んだ事実を語り、神に愛された者として、目に見える兄弟を具体的に愛する「愛」を生きることが真実の信仰であると勧めている。

ヨハネの手紙（一）は、「初めからあったもの、わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたものを伝えます」と書き出している。「初めからあったもの」は、ヨハネ福音書の冒頭の、「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」の「初め」という言葉を踏襲している。主イエスは「初め」から、天地の造られる前から存在したロゴス・キリストであると書き始めている。次に、初めからあったロゴス・キリストは、「わたしたちが聞いたもの、目で見えたもの、よく見て、手で触れたもの」であったと書いている。著者が伝えたいロゴス・キリストは、抽象的で、仮現的なものではなく、耳で聞き、目で見、手で触れられる歴史に実在した方である。これが、著者の訴えたい主イエスである。耳で聞き、目で見、手で触れられるロゴス・キリストは、「命の言葉」であり、この「命」が私たちの間に現れた。ロゴス・キリストは御父と共に先在しておられたが、「永遠の命」として受肉して、人間の世界に遣わされた。私たちは、この「命」を見て、あなたがたに証しし、伝えるのである。ヨハネ福音書1章で、「言の内に命があった。命は人間を照らす光であった（4節）」「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た（14節）」と、命の言の受肉を伝えている。

わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちとの交わりを持つようになるためである。私たちの交わりとは、御父と御子イエス・キリストとの交わりに入ることであり、神と主イエスと私たちが一つに交わる。その交わりの中で、神にある平安と主イエスの愛をいただき、わたしたちが喜びで満ちあふれるようになることが基本的な福音であり、そのために、この手紙を書くこと述べている。信仰は愛を分かち合う喜びなのである。